

**森林・農業班 B**

**ラオス北部山岳地域における社会的ネットワーク  
—アカ族の事例—**

**富田晋介 (京都大学東南アジア研究所)**

キーワード：ラオス、山岳部、生業、アカ族、社会的ネットワーク  
調査期間・場所：2003 年 9 月 17 日 -20 日、ポンサリ県コア郡

**Social Network in Mountainous village of Northern Laos  
-A case study of Akha-**

**Shinsuke TOMITA (Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University)**

Keywords: Laos, Mountainous region, Livelihood, Akha, Social network  
Research period and Site: 2003, September 17-20, Khoa district in Pongsaly province

1. はじめに

東南アジア大陸山地部は、農業の持続性、生産性が自然環境に大きく制約されている地域である [Kono and Rambo 2004]。現地住民は、農業生産の不安定性による生活の不安定を非木材林産物の採取など豊かな自然資源を利用することによって補ってきたといわれている [Yamada et al. 2004]。また、ラオスではピーノーンカンと呼ばれる親族間もしくは親しい友人間での労働交換、モノや現金の貸し借りが頻繁に行われている。よって、社会的なネットワークも生活の安定に大きく寄与していると考えられる。しかし、このような社会的ネットワークについての研究事例は少ない。そこで、今回の調査では、山岳民族のひとつであるアカ族を対象に、どのような社会的ネットワークがあるのか、予備的な知識を得ることを目的として調査を実施した。また、この調査はいまだ予備調査の段階であるので、初歩的な考察にとどまっている。なお、これは同班の横山氏との共同調査であるので、氏の報告と重なる部分も多いかもしれない。あわせて読んでいただくと、より調査地域についての理解が深まるであろう。

2. 調査地

1) 自然条件

調査地の位置するラオス北部は、海拔 500 m～1,500 m の山岳地域である。年間降水量は、1,300mm～2,200mm であり、北タイ、ミャンマー東部および中国南部と同様な降雨分布である (図 1)。ケッペンの気候区分によれば、これらの地域は温帯夏雨気候もしくは亜熱帯モンスーン気候であり、モンスーンの影響で明瞭な雨季と乾季がある (図 2)。調査地のあるポンサリ県では、7 月から 8 月にかけてもっとも降水量が多く、11 月～2 月かけて降雨が少ない。3 月～5 月が年間をとおして最も気温が高いが、最高気温は 25℃前後であり、比較的冷涼な気候である。また、11 月～2 月が最も寒い時期であり、最低気温は 10℃近くまで下がる。植生は、混合落葉林、二次林、竹林などが優占している。

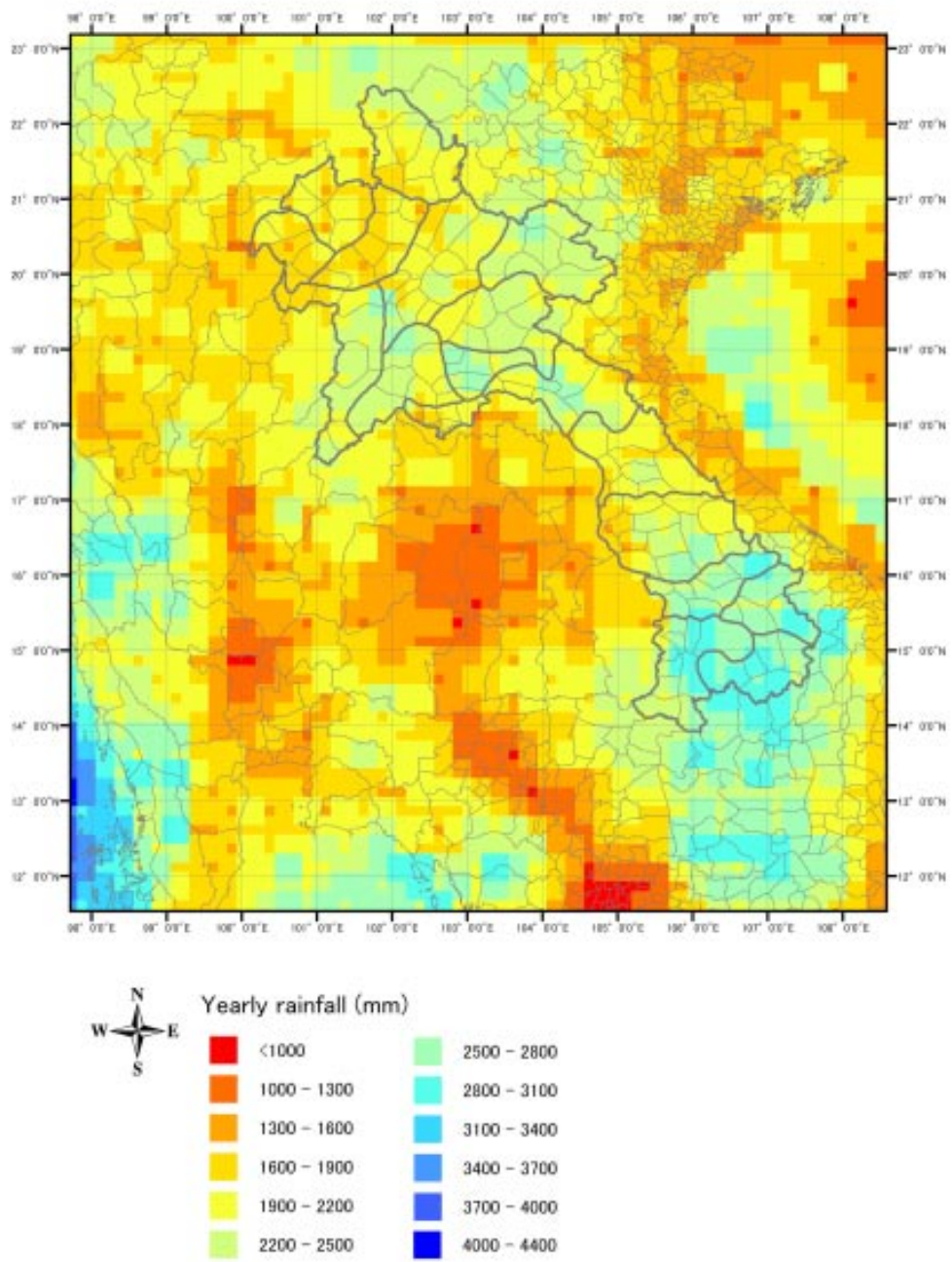


図 1. 東南アジア大陸部の降雨分布 (2003年)  
 (source: TRMM 3B42RT product)

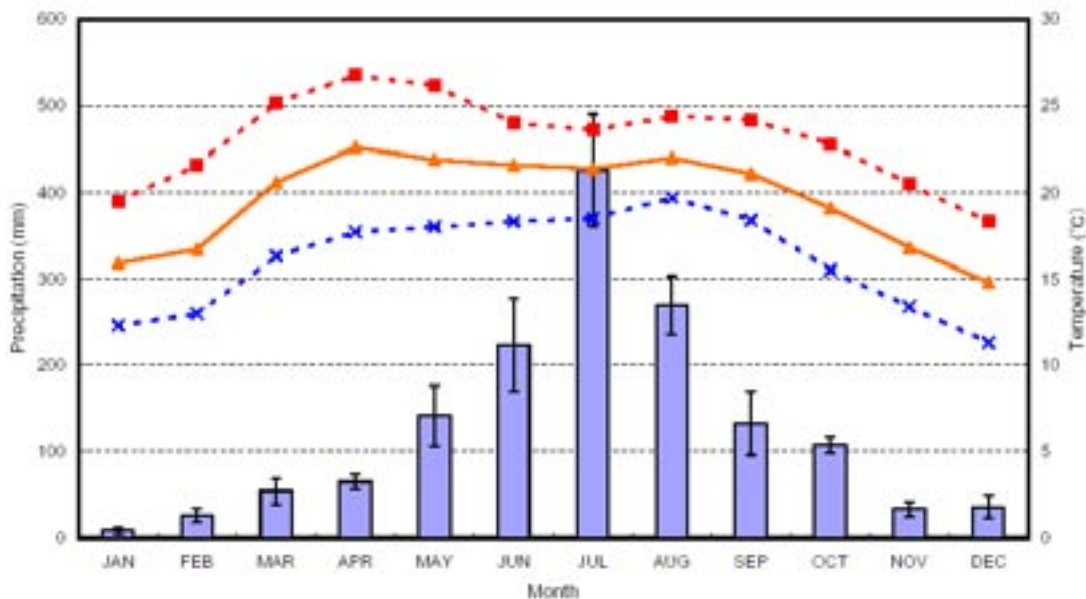


図2. ボンサリ県における降水量と気温の年間変動(1990-1997)

2) 調査村の概要

2003年9月17日～20の期間、ボンサリ県コア郡において、現地住民の主に生業活動について調査を行った。調査村は、Houayphe 村(北緯 21.08 度、東経 102.24 度、標高 562m)と PhicheuMai 村(北緯 21.16 度、東経 102.12 度、標高 841m)である(図3)。どちらもアカ族の村である。アカは、ルアンナムタ県、ボンサリ県の中国国境寄りの地域に分布しており(図4)、ボンサリ県においては、同じチベットービルマ語族のプーノイ族について2番目に人口が多い。アカは、さらに Longma, Puri, Nyau の3つに分類される。Houayphe 村は Nyau 族であり、PhicheuMai 村は Puri 族である。前者は、37 家屋、41 家族、人口 229 人(女性:103 人)、後者は 35 家族、人口約 200 人の村である。これらの村落において、村長、長老(ネオホム)に村の歴史、生業活動について聞き取りを行った。また同時に、5～6 世帯について生業構造に関する聞き取りを行った。

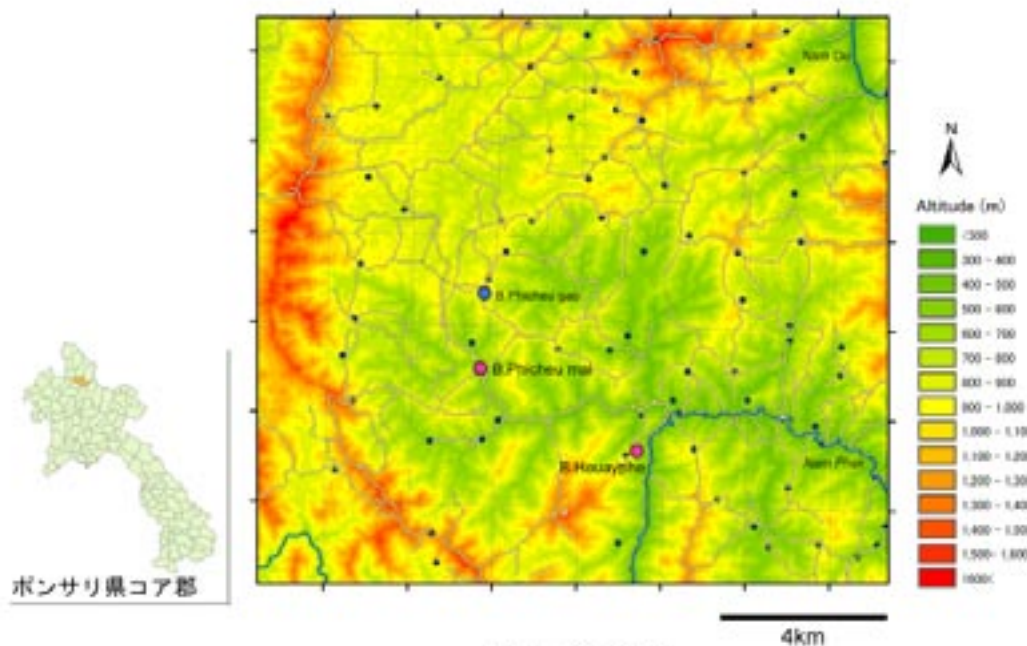


図3. 調査地域 (source: MekongGIS)

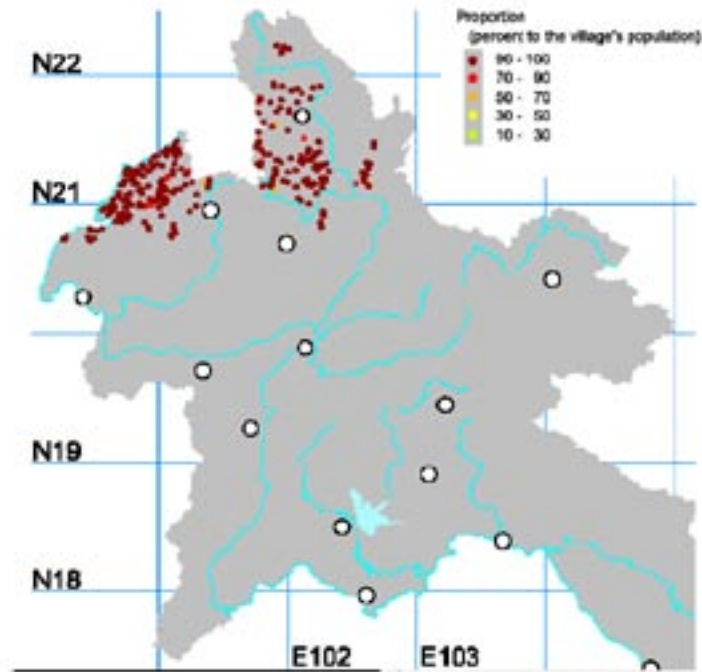


図4. アカ族の分布

(Source: Nagata, Y. 2000. Lavis-matefai)

### 3. 調査結果

#### 1) Houayphe 村

[歴史] これまで3回の移住を経て現在の場所に2002年に落ち着いた。最初の2回は、多くの病人が出たために移住し、今回は赤十字が水道と学校を作ってくると約束したために M.Khoa と Oudomxai を結ぶ道の近くまで降りてきた。

[焼畑] 村でおこなわれている主な生業活動は、焼畑（写真1）、畜産、非木材林産物採取そしてケシ栽培である。焼畑は、2～3月にかけて木を伐採し、3月～4月にかけて火入れ、5月～6月に点播され、10月～11月に収穫、11月～12月に脱穀である。脱穀には、ベトナム製の足踏み脱穀機を使っている。品種は、Khao chao deng や Khao chao dam などの伝統種が植え付けられている。どちらも、彼らの主食であるうるち米である。また、ハレの日などに食されるモチのために、Nyo bia という伝統モチ品種も植え付けられるが、播種量にして20kg～30kg程度である。休閑期間は、7～8年であり、収量は、約1.25t/haである。年によって0.25t/ha～2t/haの収量変動があるという。農作業は、親族間で労働交換を行うこともあるが、労働者を雇うことの方が多い。Nuai とよばれる労働グループで農作業を行うことはない。作付け、除草、収穫、収穫物運搬などの農作業すべてについて、労働者を雇う。労働力によって、作付面積が変わるといふ。年間、1haあたり10人の労働者を7,000～10,000kip/日の賃金で雇う。労働者は、この村の人のこともあれば、他の村から雇うこともある。また、除草剤を使用している世帯もある。村長は、3年前より Oudomxai で購入した除草剤を使用している。Eupatorium などの広葉雑草の除草に適しているが、Imperata のようなイネ科雑草には効果がないという。焼畑地には、オカボのほかに、キャッサバ、ゴマ、サトウモロコシ（写真2）、アワ（写真3）などが混作される。これらのうち、売買されるのはオカボのみである。籾は1,600kip/kg、精米は3,000kip/kgで売買される。

[家畜飼育] 家禽、ブタ、ウシ、スイギュウ、ヤギが飼育されている。ウシとスイギュウは、以前村があった場所で放し飼いをされている。家禽、ブタは、米ヌカやトウモロコシが餌である。世帯ごとの家畜飼育数はそれほど多くない。





写真1. Houayphe 村の焼畑風景



写真2. 焼畑地に混作されるサトウモロコシ



写真3. 焼畑地に混作されるアワ

[非木材林産物] カルダモン、安息香、カジノキ、ナンニャオ、ナンキョウの実、ホウキギ、籐の実、タケノコ、コンニャク、野生動物（写真4）などが採集・捕獲されている。これらの産物が売買され始めたのは、1990年代後半からである。それ以前は、利用してこなかった産物が多いという。また、アカ語で Ka he と呼ばれる山犬や、khala と呼ばれる山猫はここ 20 年の間に姿を消したという。

[ケシ栽培] 9月～10月にかけて鋤で耕起したのち、11月～12月に作付けされ、1月～2月に収穫される。作付期間中は、1月と2月に2回除草を行う。ケシ畑は3年間連作されたあと、放棄される。この村では、1家族につき3箇所のケシ畑を所有している。1家族あたりの年間生産量は、4～5 pond(2.6pond=1kg) である。ただし、収量の年変動が激しく、調査年の前年は全く収穫できなかった。9月～10月に値段が高く、1pondあたり 800,000kip で売れる。値段が低いときでも、500,000kip/pond である。フランス植民地時代、中国から Ho 族がアヘンを買いに来っていた。支払いには、Man と呼ばれる通貨や Ho の通貨が使われたという。その当時、アヘン 1 pond で 20man だったという。この当時、現金収入源は、アヘンのみであった。現在、アヘンは市場で売ることではなく、ほとんどは自家消費（写真5）もしくは村内で売買される。前年は村でケシが育たなかったために、Nam Noi の市場で購入する世帯もあった。アヘンを購入する世帯は、他の世帯の畑で労働し、現金を稼ぐことが多い。



写真4. 森で捕獲したリス



写真5. アヘン吸引の道具



写真6. トウモロコシ

[トウモロコシ栽培] ケシ畑と同じ畑で、トウモロコシ（写真6）が3月～7月の期間栽培される。収量は、100-200kg/haである。主に、ブタ、ニワトリの餌として栽培されているが、コメ不足の年には人の食用となる。コメと一緒にすりつぶし、おかゆにするという。栽培品種は、モン族のトウモロコシという意味の Sali meo もしくはアカ語で mezu atu と呼ばれる品種である。

[土地] 政府による土地区分や土地分配がまだなされていない。焼畑地、ケシ畑は個人所有である。土地は、男子に相続される。さらに、村の共有地もあり新入植世帯には村長が村の土地を分け与える。保全林、保護林、古い森は村の共有林であり、家屋建設のための建材を採集する場所となっている。

[モノ・現金の貸し借り] 村内において、コメ、現金、アヘンが貸し借りされている。コメや現金は、1年間の利子が20%～50%である。これは、他人、友人、親族間によらない。アヘンの場合、利子が300%の場合もある。村外では、コメ、現金の貸し借りがあるようである。Khoa 郡内に婚入・婚出関係のある Sanluang 村と Houayphot 村があり、親戚がいる。これらの村とのコメ、現金のやりとりがあるようであるが、詳細については不明である。

## 2) PhicheuMai 村

[歴史] この村は、Phicheugao 村（図3）から分かれた村である。当初、水源をもとめて17世帯が現在の村の位置から1時間ほど山の中に移住した。20～23年間住んでいたが、農地が狭くなったために、1993年に現在地から1km先の道沿いに移動した。1996年、病気が蔓延し、多数の死者がでたために現在地へ移動した。その当時の世帯数は、30世帯である。

[生業] 焼畑、トウモロコシ栽培、非木材林産物採取、畜産が主である。飯米はすべての世帯で不足している。8月～10月の3ヶ月間不足する世帯が多いが、2～3世帯は1年間飯米が不足する。調査年前年が最も飯米が不足した年である。飯米が不足した場合、トウモロコシを食べるが、トウモロコシもなくなった場合、市場でコメを購入する。購入資金は、家畜を売る、非木材林産物を売る、もしくは他の人の畑で労働することによって獲得している。ケシ栽培も行われているが、村全体で1haのみであり、土地がケシ栽培に向かないために収穫できないという。以前の村では、比較的大規模にケシ栽培を行っており、その当時、Ho 族やラオ族がアヘンを買いに来た。現在のアヘンの取引価格は、10teあたり70,000～80,000kipである（100te=1pond）。

[土地] Houayphe 村と同様、個人所有であり、男子にのみ相続される。

[非木材林産物] カルダモン、コンニャク、ホウキギ、カジノキ、ナンニャオなどを集めている。村にある2軒の商店が仲買人をしており、村の林産物やゴマなどの農産物を集め、Khoa 郡の林産物会社に売っている。この村でも、これらの産物が売買され始めたのは、1990年代後半からであり、それ以前は利用されてこなかった産物が多い。

[コメの貸し借り・労働] Phichiumai 村と婚姻関係のある村落を表1に示した。これらの村は、Phichiumai と同じ Kor puri 族である。この村に在住の男性は、表1に示した村からのみ嫁をとることができる。しかし、軍隊や他の仕事で村を離れて暮らした場合は、Lao tun などの嫁をもらい、帰村することができる。婚入・婚出関係があるので、これらの村に親族が散らばっていることになる。この村でコメがとれなかった場合、表中の他の村からコメを借りる。利子は、親族であっても年間20%である。また、これらの村の畑で労働に従事することも多い。除草の場合は、5,000～6,000kip/日であり、木の伐採や収穫物の運搬など重労働の場合は、7,000～8,000kip/日である。ある世帯の青年は、父親のアヘン代を稼ぐために年間40日～50日間に他の村の親戚や知り合いの畑で労働した。

## 4. まとめ

非木材林産物採取による現金収入は、ごく最近のできごとである。さらに、それまで利用してこなかった産物が急激に開発されている。それ以前は、主に自家消費目的の産物採集であった。自家消費目的の産物は国際市場で取引されることが少ないと考えられるが、現在でも生活安定の保持にとって重要な役割を果たしていると思われる。しかし、安定性の保持戦略は、急激に産物採集・利用から産物採集・販売による現金獲得へ移行しつつあると考えられる。

表1. Phichiumai 村と婚姻関係のある村落

<b>Village name</b>	<b>District</b>	<b>Province</b>
Phichiumai	M.Khoa	Pongsaly
Phichiugao	M.Khoa	Pongsaly
Huayla	M.Khoa	Pongsaly
Laosenmai	M.Buntai	Pongsaly
Laosengao	M.Buntai	Pongsaly
Burigao	M.Buntai	Pongsaly
Burimai	M.Buntai	Pongsaly
Ponsati	M.La	Oudomxai
Sapa	M.La	Oudomxai
Mai	M.La	Oudomxai
Ano	M.La	Oudomxai

ケシはフランス植民地時代において重要な現金獲得源であった。しかし、現在は自家消費目的で栽培されることがほとんどである。アヘン中毒者のいる世帯は、そうでない世帯の債務奴隷となっている可能性があり、アヘンは村内の世帯格差を広げている。これは、村落間でも格差を広げている可能性がある。

アカ族は、親族を基本とした村落にまたがるネットワークを保持している。そのネットワークを利用し、村落をまたがるコメ・現金の貸し借りが行われ、労働力が移動している。このようなネットワークは、生存に関してのセーフティネットとしての役割をはたしている可能性がある。自然資源の劣化が著しいため、今後このような社会的ネットワークの役割が大きくなっていく可能性がある。ただし、Khmu 族などにはこのようなネットワークはみられない [Kono et al. 2004]。今後、より詳しく調査するとともに様々な民族や地域における社会的ネットワークについての調査も必要であろう。

## 5. 参考文献

KONO, Y., OKADA, H., NAWATA, E. and TOMITA, S. 2004. Changing aspects of shifting cultivation in Northern Laos: Land allocation policy and commercialization of crop production. In Furukawa et al. eds., *Ecological Destruction, Health and Development: People-Environment Interactions in Contemporary Asia*. Kyoto university press, Kyoto.

KONO, Y. and RAMBO, A.T. 2004. Sustainable agro-resources management in the mountainous region of mainland southeast Asia -Preface-. *Tonan ajia kenkyu* 41(4): 423-425.

YAMADA, K., YANAGISAWA, M., KONO, Y. and NAWATA, E. 2004. Use of natural biological resources and their roles in household food security in northwest Laos. *Tonan ajia kenkyu* 41(4): 426-443.

## 6. 英文要旨

Social network such as pii-nong kan considered to play an important role on safety net against instability of livelihood in mountainous region of northern Laos. However, there is rare case study on this field. Therefore, preliminary survey on social network in mountainous region was conducted. Two villages of Akha, one of people living in this area, were selected for this study. Village head and some Neo hom (elderly group) were



interviewed with regard to general information of the village, agriculture, NTFPs collecting and so on. Tentative findings on social network of Kor people were described in this report.